

## 學界動向

## ——終戦後我國に於ける考古學の動向——

## (一) 概観

現時の日本の考古學界の状態は、客觀的に見て著しく變則的であり跛行的である。

かゝる事態をもたらした第一の原因としては、研究發表の機關がまだ回復していないことを挙げねばなるまい。戦前には數種の全國的な専門學會の機關誌のほかに、相當數の地方的刊行物があつて、毎年五六百篇の文獻の發表を見ていたのであるが、いまはそのことごとくがあるいは姿を消し、あるいは定期的活動を續けることが出来ないでいる。中でわずかに残存したものとして日本考古學會の考古學雜誌(東京、國立博物館内)と、日本人類學會の人類學雜誌(東大人類學教室内)があるに過ぎず、戦後の新興學會として登場した日本考古學研究所(市川市國府台)の日

本考古學(昭23・1創刊)や、東京考古學會(東京、明治大學内)の考古學集刊(昭23・9創刊)も、なおそれに代るほど強力でなく、京都の史迹美術同好會の史迹と美術の續刊を加えても、眞面目な研究發表の機會にはなはだ恵まれていないというのがその實狀である。

しかも終戦に伴う世情の變轉は、神話にあらざる眞實の歴史を求めて考古學者に殺到したが爲に時流に乗じた少數の人々をして、啓蒙的な概説書より、隨筆雜文の類にいたるまで、その執筆に余念なからしめた。こうして外部からある種類の考古學的文章の發表がしきりに要求せられたということが、結果において學界全體の活動を跛行的ならしめた第二の理由に考えてよいのである。そのすべてをこゝに列挙することはできないが、大場磐

雄博士の『日本考古學新講』(昭23・5)はそれらの中でもつとも良心的なものであり、後藤守一氏の『日本古代文化の話』(昭22・3)、『私たちの考古學』(先史時代篇、昭22・7)、(古墳時代篇、昭和22・9)などは年少者のための讀物として、濱田青陵博士の『考古學入門』の幾たびかの重版とともに影響力の大きかつたものであろう。たゞこれらの書物が概説書として、正しく現代の日本考古學界の到達している水準を代表し得ているか否かということになると、われ／＼は遺憾ながら満足の意を表し兼ねるのである。

いまは一々の事項を挙げて、終戦後に公刊せられた概説書の不備を指摘すべき機會ではないと思ひ、日本考古學の分野のみについても繩文式文化と彌生式文化との關係、彌生式文化と古墳文化との關係をいかに理解するかというが如き、根幹的な問題についての定説が確立されていない現段階にあるのであるから、少くとも概説書の著者はこれらの問題に對して一應判然たる態度をとる責任があるであらう。それは八幡一郎氏が「日本民族Ⅱ文化の起源と系統」(民族學研究十三ノ

三)なる座談會で述べられた縄文式の後期、千五六百年前と假定し、神武天皇の即位が二千六百余年前と傳えることとの一致に重要な意味を見出そうとされるのであり、従つてまた神武天皇以前に天照大神の物語を有することを以て、彌生式文化以前に農耕の存在の可能性を考えようとしているのであるが、この様な思考の論理は考古學の價值をみづから低めるものでこそあれ、考古學的古代史とは縁の遠いものと云うの外はない。かくて終戦後の既製の考古學者の側からの、新しい日本古代史への發言は、考古學の自然の生長が熟して、おのづから國民に傳えるに足る成果を實らせたのではなくて、國民の側からの渴望に待ちきれずにもぎとられた不稔の穂束であり引いて知識の糲としてふさわしいものではなかつたといふべきであらう。

學問としての考古學は當然歴史學の一分野であるということ、現時のわが國における遺物遺蹟の研究が、十分に古代史の組織づけに役立つか否かということは別個の問題である。まして考古學者であるならば、誰でも正しい古代史の建設に寄與しうるとは限らないことは、『日本古代文化の話』や『日本古代史の考古學的檢討』(昭22・8)にあらわれた、後藤守一氏の所説がそれを實證している。後藤氏は彌生式文化の始まりを今から二

なきものを見るとはいえ、多くは考古學的知識の偏りと、表面的な取扱ひによつて、考古學的にはほとんど特記に値しないものになつた。

それらに比べる藤間生大氏の『政治的社會の成立』(『社會構成史体系』1、昭24・4)は、相當量の考古學文獻を驅使して獨創的な判断を下している點において、看過しがたいものであつた。たゞ事實に即する考古學徒として批判の言を許されるならば、専門外の文獻涉獵に拂われた、氏の努力は多とするが、精粗新古さまざまの文獻を等しく信頼して、それらから氏の立論に都合のよい證言を集められたことには失望を禁じ得なかつたことである。蓋し考古學自身の現狀はもとより不完全であるとはいへ、なおそれ自體の發展の歴史をもつているからである。

ある議論の傍證に考古學的事實が使用されるということについては、考古學者がそれを拒む理由はないのであるが、たとえその議論は正しくとも事實の引用が間違つて居れば、われ／＼から見ればその傍證は無くもがなである。石母田正氏が史學界に大きな反響を呼び

起こされた「古代貴族の英雄時代」（論集史學、昭23・12）において、石製模造品の、「鍬と鑿と紡績車と民衆の生活とともに輝られることを欲した四五世紀の族長」を論じて、實物の鍬や鑿などの副葬品を有する三世紀の古墳にふれられなかつたのはなお恕すべきであるとしても、石の鍬として論じて居られる鍬形石が、實は貝輪を祖型とする裝身具に過ぎない事實に無智であつたことは、氏の名譽のために惜しまれるのである。

他人に嚴格であろうとすれば、先ずみずから慎まねばならない。すべては考古學に對する外部からの期待に、考古學者自身がわかに應えられなかつたところに起因していることが、こゝで顧みらるべきであらう。その今一つの實例は「日本民族Ⅱ文化の起源と系統」（民族學研究十三ノ三）の座談會における江上波夫氏の、騎馬民族の渡來によつて日本の國家が成立したのではないかという、それ自身のうち成り立ちがたい時代錯誤を含んだ一言が、意外の反響を歴史界にまき起したことに於いて見られるのである。民族學者（岡正雄氏）と先史學者（八幡一郎氏）と東洋史學

者（江上波夫氏）との對談によつて、日本民族Ⅱ文化の源流と日本國家の形成の諸問題を討論させよとした、この座談會の企劃はまことに時機を得たものであつたが、事實に撞着する所説も、相互に矛盾する見解も、ほとんど批判討論を経ずに座談が進行したところから、結果としての失敗が運命づけられていたのである。これらの諸現象を通觀する時、現時の學界にもつとも必要なものこそは、眞に責任ある學者の責任ある日本考古學概説書の執筆であることが痛感せられるのである。

戦後の日本の考古學界にとつて、まだその直接の結實は認められないのであるが、新しい動きのきざしつゝあることを指摘して置かねばならないのは、アメリカ學界の影響である。前記の座談會にも現われている様に、過去において所謂ウィーン學派の文化史學に對する共鳴者を出したわが考古學界が、アメリカ人類學界の流行兒たる社會人類學に對して無關心に過ごすとも思われないからである。クラックホーンが言ひ様に、「人類學の諸分野」江實譯、民族學研究十四ノ一、「考古學者、民俗學者、民族學者はふつとどんな文化

がいつ、どこに存在したかということに興味をいだいている。（中略）社會人類學者はあつておこつたかをたずねる」のであるならば、わが國における社會人類學の育生のために、社會學者、心理學者とともに考古學者等の協力が要請されることはいうまでもあるまい。少くともクラックホーン・ケリー共著『文化の概念』の難波紋吉氏による譯刊（昭24・6）は、われ／＼にとつても興味ある紹介であつた。

考古學と他の諸科學との提携の必要は、また考古學的調査の方法の上にも認められるのであつて、すでにその二三の試みが戦後の學界に登場した。その一つは中島壽雄氏等の電氣探査法の應用による貝塚貝層の調査、貝層下の堅穴の檢出、古墳石室の位置決定などの試みであつて、今後の經驗の増加と基礎的研究の進行によつて、ある程度の成果を期待することができると思はれる（中島壽雄・岩津潤・中林一孝「先史遺跡遺物の電氣探査豫報」資源科學研究所彙報12）。また地磁氣の永年變化と熱殘留磁氣現象とを、遺物遺蹟の

年代決定の一助たらしめようとする渡邊直經

氏の研究（『土器及び爐跡の熱残留磁氣に就いて』『人文科學の諸問題』昭和24・11）や、

燐の分布の調査によつて遺蹟の所在を探索しようとする、同じく渡邊氏の試論（『遺物包

含地遺蹟に於ける燐の分布』人類學雜誌六一ノ一）などは、いまだちにその結果を利用

しうるまでには到つていないとしても、すでに外國においても實施されている一つの方法

として、將來の發展を望むべきである。一見それらと同じ範疇の研究の様に見える

が、日本における氣候七百年週期説を提唱した西岡秀雄氏の『寒暖の歴史』（昭24・9）の

如きは、率直に云ふとわれ／＼の歓迎しがた

いものであつて、その所説の一部についてはすでに樋口清之氏の「日本文化起源年代の問

題」（日本歴史十二）なる批判もあるが、繩

文式時代が七百年週期の何循環にあたるかといふ證據を全く持たずに、繩文式文化人が蝦

夷と關聯をもつという推定のみによつて、その始源を三千年前にありと斷ずるなどは、科學に假裝した空論と極言せられても辯解の辭がないであらう。

（小林行雄）

## （二） 先史考古學關係

前繩文式文化の探究——昭和六年直良信夫

氏によつて西明石で採集された人骨石管模型が長谷部言人博士によつて新たにとり擧げら

れ（長谷部言人「明石市附近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨の原始性に就いて」人類學雜誌六〇ノ一）たことは、大きくジャーナリ

ズムによつて扱われた。これまでなお考古學の對象となる迄に發展していなかつたが、舊

石器時代文化存否問題が學界に再び關心を持たれるに至つたのである（渡邊仁「ニッポナ

ントロプス層の自然破砕礫」人類學雜誌六〇ノ三）。ところが昨年思ひもかけぬ上野國岩

宿（杉原莊介「上野國岩宿遺跡調査概報」考古學協會第三回總會）に舊石器と稱される石

器及石屑が発見された。それが舊石器であるかどうかは今後の問題であるとしても、一部

から繩文式文化以前の文化の存在を考へるものとして意義は認め得ると言われている。併

し率直に云うと此問題は從來の我國考古學者の知識を以て處理し得ないもので、此點で古

生物學、地質學の知識をも備へた前繩文式文化研究家の生れることが第一要件なのである。

## 繩文式時代

從來の繩文式文化の究明は専ら東京を中心として發展して來た。この傾向は終戦後も變りなく、その型式學的、編年

研究は益々微に入り細をうがつ程度に達しつつある。この様な編年的、型式學的研究への

批判は早くより一部の間に行われたのであるが未だそれを克服する新しい方法論は現われ

ていないので、繩文式文化の研究即ち土器破片の型式學的研究の觀を呈している次第である。これに對抗する試として、物理的、化學

的、工學的技術を採入れる研究が一部で發表され出したがこれとても今の所では考古學の

補助的手段の役割をはたすに過ぎぬであらう。夫等とは別に民俗學、體質人類學、社會

學、地理學其他關係諸學の知識を應用した先史時代の究明も行われている（八幡一郎「原始時代の社會と文化」新日本史講座 昭24・

10、八幡一郎「日本の先史文化」『日本文化の起源』昭24・1、和島誠一「原始聚落の構成」昭23・9、藤岡謙二郎「地理と古代文

化』昭22・等)。しかし何れも未だわき道の乃至試論的な意味しか持つに至らない憾がある。要するに型式學的研究は考古學、殊に先史時代の研究にとつては言葉に於けるアルファベットと同様のもので、之を縦横に驅使して文章を組立ててこそ新しい意味の古代史が出来上るもので未だその基礎のアルファベットすら整頓されて居らない状態では蓋し不得止と云うの外はない。その整備の一方法として日本考古學協會に「繩紋式文化の編年的研究の爲の特別委員會」が最近に至つて設けられたといふのはよろこぶべきである。以下に大體編年の研究の順を追つて一應の紹介を試みるであらう。

さて終戦後最も活潑な研究の行われているのは早期繩紋式文化についてである。未知の型式が發見され(吉田格「茨城縣花輪台貝塚概報」日本考古學一ノ一、甲野勇、吉田格「花輪台式文化」繩紋式文化編年圖集1、江坂輝彌「廻轉押捺文土器の研究」アントロポス三、一)それに伴う諸文化遺物、新に花輪台の裝身具、土偶、角牙器等の存在なり、花輪台と武藏北多摩郡拜島で夫々發掘された住居址

等は今迄の早期文化の内容を大きく修正するものと云われる。これ等に聯關して新發見型式や、稻荷台式井草式等の所謂捺系文土器と三戸、田戸式との關係についての論議も若い人々の間に行われた。(江坂輝彌「日本石器時代文化の上限」日本考古學一ノ二、江坂輝彌「繩紋文化の古さ」アントロポス二ノ三、芹澤長介「南關東に於ける早期繩紋文化研究の展望」アントロポス二ノ四、吉田格「南關東に於ける早期繩紋式文化に就て」人文一ノ二)

右の分野と共に早期の終りに位置づけられた茅山式文化の研究が盛んで下總鳥込(東大人類學教案昭22)同邊田(酒詰氏等昭22)兩貝塚の住居址、横濱市磯子區野島貝塚(赤星直忠「神奈川縣野島貝塚」(考古學集刊)一)に於けるそれと捺系文土器との層位的關係等が中で目立つたものであらう。又早期の確實な人骨の出土も重要な發見と云うべきで横須賀市平坂貝塚(杉原莊介・岡本勇・芹澤長介「日本最古の人骨の發見」科學朝日九ノ八)の捺系文土器に伴う人骨、下總邊田貝塚の茅山式に伴う人骨等がそれである。

以上東京附近の他に下野足利郡菱村大字黒川普門寺遺蹟(蘭田芳雄「普門寺觀音山包含地遺跡調査概報」兩毛古代文化等、酒詰仲男、渡邊仁「栃木縣菱村普門寺遺跡發掘概報」人類學雜誌六二ノ一)三河岡崎市外河村上遺蹟(岡崎郷土會)木曾谷の諸遺蹟(藤澤宗平「木曾谷の押形紋土器」日本考古學協會第二回總會)但馬兎塚遺蹟(近藤義郎氏等)備前黃島貝塚(鎌木義昌「備前黃島貝塚の研究」吉備考古七七等、立命館大學史前學會「瀬戸内海黃島貝塚發掘概報」日本史研究十一)備後常金丸遺蹟(豐元國「日本細石器文化」アントロポス二ノ三、豐元國「備後宮脇石器時代遺蹟について」吉備考古七七)等の押形文遺蹟の發掘、肥前三瀬村(七田忠志、佐賀縣史蹟調査報告「三瀬村出土の繩紋式土器」)の曾畑式土器の發見、近江安土村下豊浦干拓地遺蹟(日本考古學協會繩紋特別委員會 昭24・11)の早期を主とした遺蹟の發掘があり是等が下北半島、會津盆地等の早期遺蹟の調査等と共に早期文化の内容について吾々の知識を飛躍的に増大せしめつゝあるのである。

この様な調査の進展に伴うて特に終戦後の

新しい日本歴史の問題と關聯して繩文式文化の上限が種々論ぜられている。先ず早期の土器がローム層に喰込んで發見されたり、その再堆積層の上部に包含されることを洪積期の終末を約一万年前とする地質的見解に結び付けて、繩文式文化の上限年代を沖積期初頭とし今より七八千年前とする説（江坂輝彌「繩文文化の古さ」アントロポス二ノ二）、早期に伴う石核及剥片石器状のものを中石器と結んで考える説等がある（八幡一郎「日本の先史文化」『日本文化の起源』、豐元國「日本細石器文化」アンドロポス二ノ二）。併し第一説は地質學上の推定年代を鵜呑したもので、萬を以て單位とする地質學の推定年代を以て考古學をも律したもので、之を直ちに考古學的絕對年代とは考えられない。

一又第二説は早期の遺蹟では成程細石器的なものが出るがそれは極少數で而もその打裂は細石器と技術的に同一でなくあまつさえ精巧な新石器時代を特徴づける石鏃、磨石斧等と伴出するのであるから、我國の早期繩文式文化が新石器時代としては低度の階程にあつたを示すに過ぎないことを看過しているの

はなるからか。殊に現今東亞の細石器は熱河赤峰或は甘肅の彩陶に伴うもの以外、余りにも其の年代判定の基準を欠いている。さればその北歐のそれとの關係なしとせぬ迄も、之を到底同日に斷じ得ない筈である。

繩文式文化の前期から後期に亘る研究は、早期のそれに較べると可なり貧弱に見える。東京其他各地の發掘は枚擧に遑ないが、新しい問題を含んでいると思えるのは十指にも充たないであろう。僅かに安房加茂遺蹟（江坂輝彌「千葉縣安房郡豐田村加茂遺蹟」考古學協會第二回總會 昭24・5）で發見された諸機式に伴う獨木舟、下總長谷部貝塚（東京大學人類學教室 昭24）の中期の方形堅穴其他武藏の敷石住居址、下總姥山貝塚（*Antic Society* 及人類學教室 昭23）の墳への人骨埋葬、羽前大湯の環狀列石が（甲野勇「秋田縣大湯の巨石遺蹟」民族學研究十二ノ四）後期の住居址に密接な關係のあること、薩摩武貝塚（京都大學發掘 昭24・1）での後期の三時期の層位の再確認等が目新しい事實として記すべき程度である。

早期の問題と共に注目されるのは繩文式文化

化終末の様相の研究である。これは從來からも屢々論ぜられて来た大きな問題であるが、戦後も此問題が多くの人々によつて取上げられている。繩文式彌生式兩文化の相當期間の並行關係があつたとする説（グロート「晚期繩文式文化と彌生式文化との關係について」日本考古學一ノ一、藤森榮一「續土器と石器」梅原未治「東亞の古代文化」等）に對し、繩文式文化は、全國殆んど一様に彌生式文化に替つたとする説（山内清男「繩紋式文化終末期の狀勢」日本考古學協會第三回總會 昭24・10）が對立している。後者は論者山内氏の努力によつて西日本晚期の資料をも論據とされているが、此點で新たに初期彌生式遺蹟に存する晚期繩文式土器に注目している彌生式文化の研究家の反論も見られ（杉原莊介「尾張志賀遺跡調査概報」考古學集刊三）兩者の論議の今後の展開は期して待つ可きものがある。

晩期遺蹟の調査として學ぐ可きものは、何れも未發表であるが相模大船附近の遺蹟（明治大學等發掘）上野國山田郡川内村領永千綱皆戸遺蹟（兩毛考古學會 昭24・8發掘）の兩者から晩期の安行式に伴うて龜岡式後半の

土器が発見された。この事は從來謎とされていた關東の最末期の研究に一つの光明を與えたものと云い得るであろう。又越後柏崎附近で龜岡後半の遺蹟が確認された(大町氏)ことは龜岡式の分布圏を擴張したものであり、近江滋賀里遺蹟(京大考古學教室 昭23・1)では從來の近畿晚期繩文式文化の知識を一層確實にしたことを記すべきである。

繩文式時代人の研究については清野謙次氏の從來の資料による綜括的出版(清野謙次『古代人骨の研究に基く日本人種論』同『日本民族生成論』)の外、長谷部言人博士が石器時代人は今の日本人の人種的基础になるもので、新來者を吸收同化して今日の日本人が出来たとする説を立てられた(長谷部言人『日本民族の成立』新日本史講座同『人類の進化と日本人の顯現』民族學研究十三ノ三)。しかしして兩者何れにせよ現今の考古學的研究の趨勢と比較すれば、此方面は比較的低調と言わねばならない。このことは人骨蒐集の困難にもよるが、既往の資料を現在の考古學的知識によつて再検討しても或程度先史時代人の時間的變化の有無、地方差の問題に有益な結

果を導き得るものがある様に見える。併しこの問題は考古學者の問題より離れた面があつて體質人類學者の活躍にまたねばならない。

#### オホーツク式文化

先史時代のついでに北海道に於けるオホーツク式文化の研究にふれて置きたい。網走市モヨロ貝塚の發掘が昭和二十二、二十三年度東亞考古學會によつて行われ(兒玉作右衛門『モヨロ貝塚』昭23

・4、名取武光『モヨロ遺跡と考古學』昭23・11)その結果遼金の土器が出土して實年代を決定する材料の増した事、夏は平地住居が、冬は竪穴住居が用いられて住居に季節的變化の行われた事の判明したこと、などが挙げられるのであり、又オホーツク式文化人の人種論が新たな問題を投ずることになつた。

#### 彌生式時代

彌生式時代の研究はジャーナリズムに二三大きく扱われたが他に較べると實は貧困であつたと言ひ得るであろう。この事は戦前約十年間の目覺ましい成果によつて當時の研究が一段落したという事によるであらうが、なお多くの問題をこのすので今後の研究に期待せらるべきである。

さて、この彌生式文化の起源の問題につい

て、眞向から取上げた所論を欠いているのは淋しいが、それにふれた杉原莊介、藤森榮一兩氏の石器論(杉原莊介『彌生式文化における石器の問題』人文一ノ二、藤森榮一『五島列島福江島の石器』考古學集刊一ノ一)は、論者の大陸文化の認識の不十分な爲に承服し難いものと云うの外はない。彌生式文化の性格について繩文式文化研究家は晩期繩文式文化の傳統の面を強調し、彌生式文化研究家は大陸の影響のみを取上げているのは何れも片手落である。この點で繩文式文化の傳統の上にたつていながら大陸文化の影響のもとに出来た独自の文化であることを再認識する必要があるのではなからうか。

次に初期彌生式土器に就いては北九州と畿内に於て同時に發生した、少くとも兩者に時差が殆どないとの説が唱えられたが(杉原莊介『彌生式文化における石器の問題』、人文一ノ二)この様な説が行われる程最近では九州初期彌生式文化の研究が等閑にされていることが顧みられる次第である。これに對して東日本の彌生式文化の究明は蓋し戦後の彌生式文化研究の一つの顯著な收穫と云ふべき

であろう。尾張西志賀貝塚（人類學教室 昭23・8 愛知縣 昭23・8 明治大學 昭23・11）三河瓜郷貝塚（豊橋郷土會等による 昭22・11以降數次）信濃粟林遺蹟（北信上代文化會 昭23・11）駿河登呂遺蹟（日本考古學協會編『登呂』昭24・10）及び其の周邊の遺蹟（杉原莊介「有渡及曲全遺跡」日本考古學協會第三回總會 昭24・5）上野碓氷郡烏淵村水沼遺蹟（烏淵小學校 昭22・8 群馬師範 昭22・9、昭23・3）等の調査がその主な業績をなすものである。そしてこれ等を綜括した論（杉原莊介「東日本の彌生式の形成」日本考古學協會第二回總會 昭24・5）が現われたが、此處では東日本彌生式（初期）——從來一部に接觸式の名で呼ばれた文化——の性格と様相が問題となつていて、それは現状ではなお研究の緒についたにとどまると云うべきであろう。

彌生式文化に於ける聚落乃至住居址の研究は世に喧傳された登呂の發掘が啓蒙的な意味や、各學者の綜合研究の意味に於て、更に考古學協會成立の出發點としての意味に於てのみ注目されるべきではなく、聚落と耕地の最も具體的知識を確認し得た點で高く評價すべき

であろう。此の他筑後太刀洗に於ける濠をめぐるした堅穴群の數多の出現等は單なる住居址個々の研究より聚落全般の大規模な研究の時期の到來を示すものであろう。

住居址としては筑前立岩の堅穴（九州考古學會 昭24・8）豊前犀川村の小堅穴群（小倉高等學校 昭24・1）信濃粟林の不正圓形堅穴、三河瓜郷の堅穴、尾張中島郡荻原町二子の住居址（名大 昭24・9）上野水沼の堅穴、武藏久ヶ原の堅穴（菊地義次 昭22・23）等が調査されている。中でも立岩の調査で堅穴から粟等が出たことは彌生式農耕に一つの問題を提出したものと云へよう。又犀川村の堅穴、粟林の堅穴等は圓形の平面を持つている點で、從來彌生式の堅穴といえは隅丸四角を言われて來たのに對して違つた材料を提供したもので、犀川のそれは直徑の小さい點で北九州で燒穴と稱される堅穴と似て居りこの燒穴は大和唐古、三河瓜郷、常陸<sup>トウリ</sup>方<sup>ホウ</sup>其他多數に發見される小さなピットと共にその性格の宛明が望まれるものである。

彌生式文化に伴う金屬器の發見及調査については先ず對馬に於ける綜合調査が挙げられるであろう（東亞考古學會 昭23・8）、數十本の大きな銅鉾其他の徹底的な調査は此の方面での劃期的なものとしてその發表が待たれる。肥前唐津市櫻馬場の出土品は合口甕棺出土品として最も華かなもので（吉村義三郎、松尾禎作「唐津櫻馬場遺跡」佐賀縣史跡調査報告 八、昭24・5）そこには二面の漢鏡、巴形銅器、銅劍等が見られる。其他兩鮮と同形式のドルメンが數個の甕棺と共に發見された筑前怡土村石崎の遺蹟は當代墓制に貴重な資料を追加したものと言えよう。墓制として見落してならないものに出雲猪目の洞窟出土の具輪をはめた人骨の發見があり、この遺蹟では十數府に分れた包含層があつた點でも注目される。北九州のそれに對比す可きものは瀬戸内の出土品である。一は備前琴浦<sup>コトウラ</sup>に於ける五本の銅劍の出土で、内一本の平形銅劍はその流麗な渦文が銅鐸と規を一にする點興味が深く、二本の細形銅劍と共存している點に大きい問題がひそんでいる。他は阿波名西郡入田村源田の銅鐸三個の中央に一口の銅劍の置かれていたことである。銅劍銅鐸共存の例を追加したのみならず、その銅劍は先の琴浦の細



形銅劍と共に、形は細形銅劍に似乍ら、その質、その形の細部等から推すと、大陸よりの傳來とは考えられず、新たな瀬戸内を中心とする仿製細形銅劍の研究をうながすものではないかと考えられる。銅鐸については前記阿波の例の他、僅かに河内恩智に一例を見出すに過ぎず、此點では貧弱であつたと言わざるを得ない。

これ等の資料面の華かさに較べて金屬器文化を扱つた研究を殆んど見なかつたことは誠にさびしい。後藤氏の論文は（後藤守一「日本上代に於ける銅鐵文化の接觸」考古學雜誌三五・一、二、三）この問題を論じた殆んど唯一のものである。その内容は我國の鐵文化は自生したもので青銅器文化は殆んど之に影響を與えなかつたという大膽なものである。

このことが成立すれば過去の學說を全く轉覆さす程のもので、古墳時代刀劍については氏の永年の蘊蓄が見られるとは言え、青銅器特に細形銅劍の機能については全く近年の朝鮮半島に於ける諸學者の研究を無視して居り、又漢代鐵器についても同様のことが言える等論據には承服し難いことばかりである。殊に

筑前鶴三緒の石庖丁形鐵器を石庖丁に祖形があるから金屬文化の影響としなくてもよいと言われる等は、石庖丁が日本で自生したとも考えられているのかと疑いたくなるのである。この様に牽強附會の説は遂に鐵文化自生の萌芽を繩文式文化に認めて居られるのであつて一讀正に恐れ入つた次第である。

（坪井清足）

### （三）原史考古學關係

専門的な報告のみ多くして概括に缺くる憾のあつた古墳時代研究に、梅原末治博士『日本史講座、昭23』の二書が與えられ、久しく痛感されていた古墳概説書の不備を補ひ得たことはよるこぶべきである。殊に前者は日本古墳研究史と共に生きて來られた博士が、大陸に關する豊富な知識をも驅使して自らの體系を披靡されたものであり、通説を列記した後者とは區別されてよからう。

上記の二書に示されている通り、我國古墳墓の變遷は既に大綱を確立されているが、彌生式時代から古墳時代への推移の問題は未開

拓のまま残されており、最近漸く本格的に論議されよつてゐる。ところが古墳發祥の地畿内に彌生式墳墓の發見がなく、かつ古式古墳時代の土器が不明である爲、兩時代を結ぶ緒を缺き、全く相反した見解が對立している。其の一は彌生式墳墓を營んだ北九州の民衆が銅劍を持つていたに對し、同じく銅鐸なる進歩した青銅器を持つ畿内彌生式人に墳墓の營造がなかつたとは考え難いとして、彌生式文物と古式古墳の同時存在を推測する梅原博士の説であり（上掲書）、これに最も對蹠的な見解は古式古墳時代の土器に「祝部土器を伴わない土師器」をあて、彌生式時代と古墳時代との間に社會的經濟的な激變に伴つた古墳の急激な發生を考え、兩者をあくまで別個の時代と見る小林行雄氏の説である（同氏『日本古代文化の諸問題』昭22）。此の難問の解決手段として、古墳時代住居址より出土する土器の系列と後期古墳より發見する土器の系列との比較對照の必要が、早くから梅原博士により指摘されているが、畿内住居址の調査が遅れている爲早急な解決は望めない。既に各地の調査研究の狀況を概観して、既

に確立された古墳變遷觀に何がつけ加えられたかを検討してみよう。まず畿内では戦後も數々の發掘調査が行われたが、其の内古式古墳に屬するものには、堅穴式石室内より豊富に一括遺物を出した攝津三島郡豊川村紫金山古墳(京大昭22)堅穴式石室内に割竹形木棺を遺存した大和磯城郡櫻井町茶臼山古墳(奈良縣昭24)の二つの前方後回墳がある。前者では石室の構造が完全に調査されると共に石室兩外側に鐵器類の埋藏を發見し、後者では石室の周圍に土器の列が檢出され、主體構造の外部の遺物埋置につき新知見を得る所が多かつた。前方後回墳の盛期に相當する古墳については、埴輪の調査が顯著な進展を示している。特に、伊賀名賀郡依那古村石山古墳(京大昭23、24)河内南河内郡黒山村黒姫山古墳(大阪府昭23、24)の二つの前方後回墳や大和宇和奈邊古墳陪塚の方形墳(奈良縣昭21)に知られた埴輪配列方式の詳細は他の古墳に於ける斷片的な知識の解釋に役立つものである。なお石山古墳からは斗東を表現した家型埴輪の發見があつて建築史家に新しい問題を提出しており、黒姫山古墳前方部

の武具のみを収めた副葬品室とも語りべき堅穴式石室の發見も新事實である。堺市百舌鳥赤畑町カトノボ山(森浩一「子持勾玉の研究」古代學研究一)の粘土埴内より石製模造品と共に出土した子持勾玉は、松江市金崎古墳(後出)で遺骸の頭部と推測されるあたりに發見した一對と共に、從來稀であつた子持勾玉の確實な古墳墓出土例である。後期の横穴式石室墳には攝津三島郡豊川村青松塚(京大昭22)河内中河内郡大戸村石切大塚古墳等内容や葬送状態の判るものが次第に増加している。最末期の古墳には奈良市春日山群集墳の發掘がある(奈良縣抄報第三輯昭23)。

畿内古墳の知識にもついで編んだ現在の古墳型式觀を直ちに地方の古墳に適用することの危険は既に戦前より反省され、地域的な調査により各地で夫々一貫した古墳の發展をたどる必要が痛感されていたが、戦後の地方に於ける古墳調査は果して此の線にそつているのであろうか。まず西日本を見るに、中國四國では注意すべき調査の乏しい中に、松江考古學會の山陰に於ける活動が稍々目立ち、地方色の濃い此の地の古墳が調査されていることはよろこばしい。同會の發掘になる松江市下川津金崎古墳(梅原博士指導)は同地の前方後方墳の一つであり、堅穴式石室内から既述の子持勾玉と共に朝鮮色濃厚な視部土器を出している。九州では北半部に調査が集中し、地域調査の必要を自覺した九州考古學會により、北九州前方後回墳の組織的な調査が行われている(森貞次郎「北九州前方後回墳の調査」人文一ノ三)。北九州は大陸の影響を受けると繁く、墓制の上でも逆に畿内に影響を及ぼしたと思われる點があり、此の地に於ける地域調査は特に重要な意味を持つものである。同じく地域的な調査であつた東亞考古學會の對馬探險は、同島に多い積石塚が其の內容に於いて内地古墳と大差なくて、朝鮮の積石塚の影響とするよりは、土壌に乏しい同島自生のものと考えべきことを明かにした。

次に東日本に移つて、中部地方では、同一木棺内に二人を葬つたと推測される信濃長丘村山の神古墳をはじめとする信濃下高井郡方面の調査(北信上代文化會昭23、横穴式石室内から冠・馬具土器等を出した静岡市磯城山古墳の發掘(後藤守一氏)以外注意すべき

ものは少い。關東では直弧文を刻した石枕を發見した上總市原郡姉ヶ崎町二子山古墳(國學院大學)、木炭椰の好例上總長生郡東村能満寺古墳(大塚利重「上總能満寺古墳發掘調査報告」考古學集刊三)、石製模造品・甲冑・盾裝具を出した上野太田市島山古墳(群馬師範 昭23)、埴輪の配列を確めた上野新田郡生品村二ツ山古墳(慶大 昭23)等發掘發見は多いが報告されたものが少く其の詳細は不明である。關東に於ける新しい試みとしては、上總市原郡市原臺地の先史時代から歴史時代にわたる遺蹟群に對し、地理學的觀察をもつて加えた地域綜合調査が行われているが、なお目的とする各遺蹟間の内面的關係をたどり得るに至つていない(千葉縣史蹟名勝天然記念物調査報告書「第一輯」尾崎喜左雄氏の上野に於ける埴輪窯址の發掘及び其の製品配給圖の調査も新しい着想であり、當代の生産配分關係の考察に基礎資料を提供するものである。最後に今まではほとんど學術調査の圏外にあつた東北地方で磐城相馬郡眞野古墳群の二十餘基が一舉に發掘され、避遷の地に於ける古墳文化の一端を窺い得たことも意義

深きことである。(藤田亮策「眞野古墳群調査概報」史學二三ノ三)

發掘の盛況に比し研究的勞作の發表せられたものは極めて少い。遺物に關するものには梅原博士「本邦古墳出土の同范鏡に就いての二の考察」(史林三〇ノ三)、大場磐雄氏「藤

手刀に就いて」(考古學雜誌三四ノ一〇)及び概説書風に書かれた末永雅博博士「埴輪」(昭22)があるにすぎない。梅原博士の鏡の研究は、同范鏡の分布から當時大和が全國に對し中心的な位置を占めていたことを示されており、多年の蒐集になる老大な資料に精密な觀察を加えた結果自然に導かれた結論として他の追隨を許さぬものである。葬制・葬送習俗に關しては舊稿をまとめられた齋藤忠「日本古代社會の葬制」(昭22)鏡山猛「日本古代殉葬に就いての一考察」(史淵三五 昭21未完)がある。小林行雄「日本古墳の舟葬説について」(西宮三 昭21)は學界一般に行われている舟葬説を否定したものの、同氏「黄泉戸ヨミド」(考古學集刊、昭24)は古墳に於ける種々の事象を綜合して、墓前の食物奉獻が火の禁忌を生むに至る過程を考察されており、考古學

の資料を用いた民俗學的研究の可能性を示すものである。大陸との關係を取扱つた齋藤忠「上代に於ける大陸文化の影響」(昭22)は事實の羅列に終つた感のあるのは残念である。(横山浩一)

#### (四) 歴史考古學關係

一 揺れある毎に大きな波紋を描き、常に日本美術史上最大の問題を投げかける法隆寺問題は、壁面燒失、五重塔下舍利容器發掘という相續く大事件の伴奏の下に最も時代の脚光を浴びた。解體修理事業は遅々たる中にも進展をとげ、第十冊目の報告書「法隆寺東院に於ける發掘調査報告」(昭22)が出た。そして最後の五重塔及金堂の解體が戰爭末期から始まり、論争解決に一步を進めるものとして大いに期待されたが、その成果の概略は淺野清「法隆寺の金堂と塔」(史林卅一ノ三、四)「法隆寺」(アテナ文庫二九)、「法隆寺昭和修理によつて見出された新事實」(佛教藝術三)等によつて知ることが出来る。調査は極めて科學的で、天井裏の古梁から樺の一本々の釘穴に至るまで、綿密に觀察計測されて、

從來何回か行われた修理の實際から、建立當初の原型が復原される途になつた事は今日の科學的調査の最高水準を示すものとして賞讃されてよい。この解體に際して新たに發見せられた五重塔内壁画、金堂天井板の落書等について久野健（美術研究一四四）淺野清（佛教藝術一）石田茂作『伽藍論攷』（昭22・8）等に報告があり、最後の石田博士はそれから建立年代の上限を天武朝、下限を和銅頃として再建説の新證左としている。法隆寺論争關係論文として戦後初めて出たのは村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」（寶雲三六）である。博士は法隆寺系建築の特色とし雲形斗拱・皿板・人字形束・天蓋の四つを挙げ、それを中國の建築諸例から前の二者を北齊よりも以前の様式、後の二者を北齊・隋代の様式と考え、この二様式が別々に百濟を経て日本に來り、法隆寺に於て一様式として統合されたとし、後者が日本に入つてきたのを推古天皇代にしては余りに傳播の速きにすぎるとして再建説に味方して居られる。中國建築の知識から四要素の性質を論じられたのは極めて實證的であるにも

拘らずそれから法隆寺建立年代を推すのに「建築の様な技術の傳播にはたいいて長年月を要するを常とする」という推論で決して居られるのは科學的でない様に思われるが、彫刻にしても飛鳥様式が、中國龍門の様式をうけているとすれば、こゝにもかなりの年月の差が見られるから、博士の推論は事實かもしれぬ。然しそれは建築だからというやうなものではなく、當時の外國文化の受入れ方に何か特殊事情があつたやうに思え、そこに問題の鍵がひそんでいるやうに感ずるのである。要はその中間地である百濟の様子が全く不明であることで、その方面の研究が望ましい。唯博士が今日の法隆寺建築を白鳳様式と考え、それから推古様式といふものを、廣く中國を含めた立場から考定して居られるのは大いに施すべきで、日本の文化美術を考へるにも常にかゝる廣い立場からの考察が必要であることはいりまでもない。次に新しく再建論の一説として出されたものに町田甲一「法隆寺問題に就て」（藝文三）がある。氏は先ず足立博士の新非再建説を批判した後、

て方が三體の本尊を安置する形式の下に初から計画されている點が一般寺院形式内容と異なる事を指摘して、それを再建論の立場で合理的に解釋する假説を叙べたものである。その立論が綿密精細を極めたものである事は充分に認められるが、考古學の側からするとなお新説の一が提出された域を多く出でないであらう。それ等よりも廿四年一月廿六日の災事が壁画自體の科學的調査をする唯一最後の機會を興えた點を重視すべきで、この方面の専門家の急速の研究こそ大いに期待される。更に廿四年十月に行われた舍利容器の再調査は世間にやかましい建立年代を決定すると云ふ面は別としてこの分野に一つの重要な資料を提供するものとして調査の報告が待たれるのである。長き法隆寺論争を整理したものとして、村田治郎『法隆寺の研究史』（昭24・10）春山武松『法隆寺壁画』（昭22・1）がある。特に前者は私見を滅した公正な立場から些細な論文をも無視することなく、極めて要領よく解説されている點で、この種の第一のものとして云えよう。これらを通して今日法隆寺問題も既に結論に達した感が深い。かつて明治の

末年史學雜誌の學生委員たりし濱田博士が關野、平子兩氏の非再建設に賛成して「法隆寺問題解決せり」と云われたその全く逆の立場に於て同じ言葉がこの邊で繰返されてよいのである。

法隆寺と共に戦後大きくクローズアップされてきたものに崇福寺問題がある。大津京跡附近には滋賀里山中と南滋賀の二ヶ所に寺院跡があり、之を白鳳創建の崇福寺と、平安建立の梵釋寺のいずれに比定するかゞ問題の骨子である。論争の経過については梅原末治博士「崇福寺問題とその経緯」(史迹と美術一七三)に詳しいが、二回の發掘調査の結果南滋賀廢寺が白鳳期のもので梵釋寺となし得ないことが明かにされたと共に従來平安期の古瓦しか出なかつた滋賀里山中廢寺も白鳳期に遡りうる事が判り、後者を崇福寺とする梅原博士の見解を引きつがれた柴田實氏の報告が公にせられた。所が石田茂作博士は出土の金銅舍利容器の香様が奈良朝末期を遡り得ないといふ疑問を出して居られたのである。かくて梅原博士は総合的見解を「近江滋賀里崇福寺の塔趾」(寶雲卅三・卅四)に披瀝された。

即ち博士は塔心礎の手法が他の白鳳期寺院趾に多いこと、白鳳期と思われる丸瓦や博佛が少數ではあるが出土したこと、更に舍利容器にしても神龍二年奉安の銘ある障州皇福寺三層石塔出土の舍利容器との類似が特に前者の貼銀鏡背の唐草文と後者併出の佛像光背のそれとの間に見られる所から本寺趾の年代を白鳳期に遡りうるとして所傳の崇福寺とする確實性を強調せられたのである。所が廿一年六月この舍利容器が奈良に提覽された際石田博士がなされた列品講座(崇福寺の遺趾に就いて)『伽藍論攷』所收、史迹と美術一七五)に於て本寺趾を梵釋寺にあてんと説かれた爲に、こゝにはからずも論争が具體化するに至つた。石田博士は伽藍占地、同配置、礎石、塔心礎、舍利器、銀錢等の年代から滋賀里廢寺の方が新しく、それが諸文献より、梵釋寺が山中寺院と推定される所から、滋賀里寺趾を梵釋寺、南滋賀寺趾を崇福寺と推定されたのである。よつて梅原博士は「崇福寺問題とその経緯」を草し、石田博士又「崇福寺問題に就いて梅原博士の示教に答ふ」(史迹と美術一七七)と題して應酬せられ、共に自説を

再主張されたが、この論争に刺戟されて福山敏男博士は滋賀里山中寺趾の三峯の中、従來平安期の瓦を多く出した南大形の遺趾を以て梵釋寺と比定される説を提出され(梵釋寺について史迹と美術一六七號)、田中重久氏も一文(史迹と美術一七四)を草し福山博士と同説を出している。以上の諸見解を總攬するに問題は滋賀里山中廢寺の中、北・中の峯の寺趾をも梵釋寺とするか、或は之を崇福寺とするかになる。今兩説の年代觀をみると、心礎の状態、博佛、古瓦の一部は一般考古學的見解からいつて奈良朝代のものたること梅原博士の説く如くであつて、石田博士の方はその各々が推定を含めて考えられ得る最下限の年代の平安時代まで下りうるとして建てられた論であつて様式觀からする年代推定としては甚だ穩當を欠くといわねばならぬ。博士としても問題の遺趾並びに出土品の各々が平安時代より絶対に遡り得ないと言出來るであろうか。そうすれば梵釋寺の建立せられた延暦五年以前に、滋賀山中と南滋賀の二ヶ所に寺院が存在していたことになる。考古學では此處迄しか云い得ないのであつてこの中

前者を崇福寺とするのは延歴僧録や扶桑略記の記事が文献史家によつて間違ない、と断定されりるか否かに俟たねばならぬ。従つて若し石田博士にして自説を主張せんとするならば、今日この方面で一般に認められている肥後、福山兩博士の所論に對して文献史的反證がなされなければならぬ。

終戦後の解放から特に研究が自由になりつあるのは正倉院御物である。従來天平藝術即唐朝美術の代表遺品として通用し、この方面に於ける原田淑人博士の業績は戦後に於ても「正倉院御物と唐代貴族の用度」(考古學雜誌廿四ノ十)があるが近年御物をかゝる漠然たる兩文化の典型とすることには満足せられなくなり、中國からの傳來品と本邦製品の二者を區別し、それから兩文化の特異性をつかむことが試みられ、早く梅原博士の三彩釉器銀器等に關する業績があつたが、戦後かかる傾向を説かれたものに同博士「考古學上觀た正倉院」(知恵七)、水野清一「考古學上よりみた正倉院御物」『正倉院文化』所收)があり、その傾向をうけて御物の個々を論じたものとして小山富士夫『正倉院三彩』座右

寶叢書、樋口隆康「正倉院銀壺」(史迹と美術一八〇)をあげることが出来る。一方正倉院建築上の問題として雙倉説三倉説が新たに石田茂作、村田治郎、藤澤一夫の諸氏によつて取替はされ、又樂教論の「御書」の解釋問題も石田博士の扱じた一石が意外の反響を呼んで、二十三年度の史迹と美術誌上を賑わした。

以上の三つが戦後のわが歴史考古學界に於て最も大きな問題とされるがその他にも個々の調査研究の中には重要なものが多數ある。先ず寺院關係のものとしては藤澤一夫「四天王寺五重塔下の遺構について」(史迹と美術一六九)があり、地中深く何回にも亘つて掘えられた柱基礎工事の實際が法隆寺、崇福寺の場合と關聯した事實を示すものとして注目される。石田茂作「布目瓦の時代判定」(考古學雜誌卅四ノ十)、原田淑人「琉璃瓦の裝飾様式について」(佛教藝術五)等は古瓦關係の論文として留意される、寺院址の調査では梅原博士の行われた伊賀國名張夏見廢寺、石田博士の調査された丹波國周山廢寺、登呂調査の副産物といえる登呂廢寺等があり、何

れも未報告であるが特に夏見廢寺は山城高麗寺等の所謂法隆寺逆式伽藍配置をとつた白鳳期の寺址で、多數の出土の埴佛の中、押出五尊佛に近い構圖の大形埴佛のあるのは、從來藤井有隣館、唐招提寺等に存する同種埴佛片と一致したものと見る事で見目される。

住居址としては廿四年八月武藏野博物館員の手で調査された武藏國分寺横の方形堅穴は文字のある國分寺瓦で造つた甍が北壁にあり、奈良時代の堅穴として構造の明かな新例を加へたものといへよう。

その他火葬墓關係として島田曉氏が報告された大和宮崎村出土の金銅骨壺の珍例、齋田、坪井、村田氏等の古鐘尺度論等枚舉にいとまないが、既に紙數も盡きたこと故總て省略するとして最後に歴史考古學が時代の様相を最も具體的に示す文献との關係から、他の史前並びに原史考古學と異なる独自の方法なり考慮がなされるべきであり、ひいてその方法論の確立こそ、最も要望されるにも拘らずかかる問題を本格的に追求する機運の未だ學界に萌さざること吾々の怠慢として大いに自戒すべきであらう。(樋口隆康)(二二頁)